



家庭教育講演会〔全体講演会〕

演題 「困った子は困ってる子

～奈良少年刑務所 絵本と詩の教室～

講師：作家 寮^{りょう} 美千子^{みちこ} 先生

日時：令和元年 10 月 29 日 10:00～11:00

会場：リーガロイヤルホテル大阪

《寮 美千子先生 プロフィール》

- 東京都出身、千葉育ち。
- 外務省勤務、コピーライターを経て
- 1986 年、毎日童話新人賞を受賞。
- 2005 年、『楽園の鳥』で泉鏡花文学賞を受賞。
- 2006 年、古都に憧れ、首都圏より奈良に移住。
絵本、詩、小説、自作朗読と幅広く活躍中。
主な著書に『星兎』『夢見る水の王国』『ラジオスターレストラン 千億の星の記憶』
などがある。

講演会は阪私幼研究部長の岡部宏明先生の講師ご紹介のあと、60 分という短い講演でしたが、あっという間に過ぎました。以下、講演に参加されたあるお母さんの手記をご紹介します。

■ 奈良少年刑務所との出会い

寮先生は、首都圏から「奈良」へ移住後、仏教や古代の文化などを学びながら静かに小説を執筆しようとしていたところ、奈良少年刑務所に会いました。奈良少年刑務所とは、明治時代に 26 歳未満の受刑者を収容するために建てられた懲罰施設で、赤い煉瓦造りのモダン建築を特徴とした「明治五大監獄」の 1 つとしても知られています。老朽化のため 2017 年に廃庁となりましたが、100 年以上もその荘厳な佇まいを保っていたことで歴史的価値・美術的価値の大きい建造物です。普段は一般開放されていないため門の中へ入ることはできませんが、毎年 9 月に受刑者が刑務所内で製作した物品を販売する「矯正展」が開催されていました。

建築マニアでもあった寮先生は移住したその年に奈良少年刑務所での矯正展に赴き、展示されていた受刑者の俳句や絵画を目にしました。

そこにはとても重い罪を犯したとは思えないような繊細な作品がいくつもあり、心を打たれた寮先生は教育統括の担当者に「何かお手伝いできることがあれば連絡を」と軽い気持ちで名刺を渡して帰ったというのが、この奈良少年刑務所と寮先生を結ぶ最初のきっかけとなりました。

10 ヶ月後、早速担当者から特にコミュニケーションを困難とする受刑者を対象に、詩や絵本を使って教育を行う「社会性涵養（かんよう）プログラム」という奈良少年刑務所独自の取り組みを開始するにあたり、寮先生に講師をお願いしたいとの依頼がありました。

対象とする人たちは、少年院ではなく窃盗や殺人など重罪を犯した刑務所の受刑者。いわゆる「恐い人たち」であることで二の足を踏んでいた寮先生ですが、担当者からの熱心な依頼により講師を引き受けることになりました。

■「社会性涵養（かんよう）プログラム」の講師として

プログラムの期間は半年で、月1回の授業を行い全6回の授業を終えるとまた別の受刑者と総入れ替えになるというサイクル。たった6回の授業で少年たちに益をもたらすことが果たして自分に出来るだろうか…と不安を抱えながらプログラムが始まりましたが、最初の授業ですぐに効果が現れ、結果的にそんな不安だった気持ちは取り越し苦労だったことを知ります。

寮先生の思うままに授業を進めて下さいと言われ、全くの手探りで始まった授業。最初の授業では怯えきって教官の陰に隠れてしまうような者、踏ん返り返っている者、放心している者、下を向いたまま声を発しない者など様々な受刑者に、自身が制作したアイヌの親子のやりとりを描いた絵本「おおかみのこがはしってきて」を題材に、民族衣装を着せて物語に出てくる父親役と子供役の2人ずつのペアを組ませ、前に立って2人主役で朗読をさせました。

人前で発表したことがほとんどないような者たちばかりなので、最初はやりたがらなかったそうです。でも緊張で額に汗をかきながら、少しずつ一生懸命朗読をし、聞く者も緊張しながら一生懸命聞く。時間をかけながらも朗読をひと通り終わると、その場全体に安堵の空気が流れ、割れんばかりの拍手が沸き起こりました。発表が終わると、最初は心を閉ざし仏頂面だった者が口々に「緊張しました」「拍手がもらえて本当に嬉しかった」「やってよかったです」と言って顔つきも別人のように変化していました。

1時間半の授業の中で2回3回と発表を重ねるうちに、最初は全く役をやりたがらなかった者が、自分から意欲的に「やりたい！」と手を挙げるまでに変化。元々自分の殻に閉じこもりコミュニケーションを取ることが苦手だったような者たちばかりの状態だったにもかかわらず、授業が終わる頃には全体に仲間意識が生まれていました。

表現をすること、そしてそれを受け止めて拍手を送ってもらうこと。それだけで人は変わるものなんだと寮先生はその時強く感じたそうです。つまりそこにいた彼らは、逆に言えばそんな心のケアも受けてこられなかったということです。

発表がどうしても出来ないと言ったある者には無理強いせず「やりたくなったらいつでも言ってね」と言ってそっとしておいたら、ひと月後の授業で真っ先に手を挙げ、発表の後には「今まで、出来ない・やりたくないと言うとダメじゃないかと叱られたり励まされたりして辛かったけれど、待ってもらえたおかげでちょっと頑張ってみようと思えました。自分に自信がついて更生できそうな気がします。」と感謝されたそうです。

■「安心・安全な場づくり」

私たち子を持つ親としても大切にしたいこと。それは「出来ない」と言われたら、まずじっくり待つあげること。出来ないと言っている子にやみくもに一生懸命励まして良いのは場合によりけりだそうです。「やってみたいけど自信がない」というところまで来ている子は背中を押してあげると良いけれど、本当の心の準備が出来ていない子には、無理な励ましがかえって逆効果になる場合も多い

のだそう。よく観察しなければ危険であり、子供の力を信じてじっと待ってあげて、安心・安全な場を作ってあげることが大切だと寮先生は言います。

寮先生の授業で刑務所の中でも誰ともうまくやっっていけず爪弾きされていたような彼らが心を開いていったのは、その授業の場が安心安全な人と場所、そして時間だったからといえます。

■「心の傷付き」

彼らのようなとんでもない重罪を犯してしまう心の背景には、一番信頼している親からの肉体的な虐待や精神的な虐待、ネグレクト、中には教育に対しての親の理想が高まるあまり、少しでも良い点が取れなければ強く責め立て続けてしまったり、友達と遊ぶ暇もなくスケジュールを組まれてしまったりする教育虐待と呼ばれるものなど、様々な「傷付き」がベースになっているのだそうです。

そんな子は、親の期待に沿った人間にならないと自分は愛されないのではないかと感じて頑張ります。「できたことに対して褒められる」といったような「条件つき自信」をつけてしまうことを繰り返すと、褒めてもらえなければ愛してもらえないという思考になり、いつか頑張りすぎて心の糸が切れてしまい、少しでもつまずくと途端に自信を失ってしまいます。その気持ちが自分を責めると自分を傷つけたり、あるいは怒りに変わりその矛先が外へ向けば非行や犯罪へと変わってしまったりするわけですが、根は一つで様々な「傷付き」が元になっています。

未来ある子供たちがこの傷付きによって悲しい結果を生まないようにするためにも、「〇〇ができたから褒めてあげる」といった条件付きの自信ではなく「あなたが生まれてくれてここに居てくれて本当に嬉しい」といった絶対的な自信を育て、それぞれの家庭が子供たちにとって本当の意味での安心安全な空間であるように心がけていきたいと思いました。



(西高殿若葉幼稚園 保護者)